

比叡山三塔の一つ、横川中堂の北の玄関口である天津市仰木町の上仰木遺跡から、平安時代終わりごろの土師器の皿に絵を描いた珍しい墨画土器が、大津市教育委員会の発掘調査により見つかった。

美人は、頭上に物をのせた描写から、京都の大原の花売りを連想させ、当時の庶民の生活を垣間見ることができま

す。この皿は、大きさが14・3センチあります。内面には3本の薙刀と僧侶、女性、天地逆にして別の女性が、外面には頭上に物に乗せて川を渡る女性と複数の女性の顔が描かれています。絵師が練習のために描いたと思われませんが、当時の風俗や生活史を知る貴重な出土品です。下膨れの平安

次に僧侶と薙刀に着目し、中世の僧兵について紹介します。僧兵といえば武蔵坊弁慶を思い浮かべる方も多いでしょう。弁慶はほとんど創作上の人物で、その記録は「吾妻鏡」などに数行記されているだけです。モデルは平安時代末期に比叡山に実在した僧兵俊章とされています。誕生地とされる紀伊田辺駅前弁慶像は長い薙刀を持ち、頭には袈裟頭巾、身にかけた法衣の下に鎧、足に高下駄の典型的な僧兵姿です。

院政を開始した白河法皇は「加茂川の水、双六の賽、山法師、それぞれ朕が心に随わぬもの」（『源平盛衰記』）との言葉を残し、叡山の僧



僧兵が描かれた土師器皿

(大津市教育委員会提供)

比叡山の僧兵

山法師強訴図 (県立琵琶湖文化館提供)



兵の嗽訴を嘆きました。これは叡山の僧兵が神罰・仏罰や武力を振りかざし、自らの要求を通そうとしたという意味です。僧兵の要求はさまざまで、寺門(園城寺)との座主争い、朝廷貴族の罷免、山門荘園と国司の争い事、神人の傷害事件、神輿の造営・修繕などです。

その始まりは天元4年(981)の円仁一門による入洛嗽訴といわれます。嘉保2年(1095)に、初めて坂本の日吉山王社の神輿を担いで

入洛した記録があります。神輿は神の乗り物であり、神は御旅所以外決して動いてはならない存在ですが、その神が入洛し、禁裏(御所)に迫ることは当時の貴族にとっては非常な恐怖でした。関白藤原師通はその神輿を射ることを命じたため、山門導師の七日七夜の呪詛にあり、熱病で3年後に38歳の若さで没したとされています(『愚管抄』)。

そのことが恐怖の伝説として後世まで引継がれ、その結果、山僧の嗽訴には「神輿振

り」と呼ばれる「神輿動座」が度々行われました。

事が起ると、日吉社から担ぎ上げられた神輿は根本中堂前に結集し、全山の大家がかねを打ち鳴らし意気高揚をはかります。神輿を奉じた僧兵たちは、松明を掲げ、雲母坂から西坂本(京都側)に下り、加茂川を渡り、御所や摂関家の邸宅に嗽訴に及びました。一方、朝廷側は源平両氏の軍勢で進入を阻止しようとし、加茂川で阻止された神輿は祇園社に集結して機をうかがいました。入洛した僧兵たちは禁門(御所)前に神輿を置き去りにしたり、放火や狼藉を繰り返したりすることで要求を勝ち取るうとしました。その回数は、およそ500年間に100余回に及んでいます。その僧兵も、室町時代の終わりごろには勢力を弱め、信長の比叡山焼討ちで完全に姿を消しました。

江戸時代に修復された神輿は、「日吉山王金銅製神輿」として重要文化財に指定されています。現在、日吉大社境内の収蔵庫に保管され、常時見学することができます。(財団法人滋賀県文化財保護協会 濱修)

法王も嘆いた嗽訴「御輿振り」